

ダイコン黒斑細菌病

病原: *Pseudomonas syringae* pv. *maculicola* (シュードモーナス シリング 病原型 マクリコラ)
細菌の一種で土壤中に生息しています。風雨によって飛散し、害虫などによる傷口や葉の組織から侵入します。春と秋に発生が多く、温暖多雨の時に激しくなります。また、砂質土壌で発生しやすく、窒素質肥料の不足で生育が緩慢になった時などは発生が助長されます。

症状:主に葉、根頭部に発生します。葉では明瞭な黒褐色で縁取られた灰色~褐色の病斑になります。根頭部では灰色~黒色の不整形の斑点となり、内部にまで侵入することがあります。

対策:①強い風が吹いた後や台風後には登録農薬を散布して予防に努めてください(銅水和剤は薬害に注意が必要です)。

②生育中期以降に肥料切れを起こさない肥料管理が重要です。

③アブラナ科の連作を避けることで土壌中の病原菌密度を減らすことが出来ます。



ネギ萎凋病



病原: *Fusarium oxysporum* f.sp. *cepae* (フザリウム オキシスポラム 分化型 セパエ)

糸状菌(カビ)の一種で土壤中に生息しています。被害植物の残渣に付着するだけでなく、耐久性のある厚壁胞子を形成し長期にわたって残存します。このため輪作圃場でも被害が激しくなります。晩春から初秋に発生が多く、特に夏季高温期に多発します。酸性土壌で菌の活動は活発になります。

症状:下位葉が黄化萎凋し、幼苗では立ち枯れます。生育が進むと、重症株は株全体が枯死、軽症株でも根が腐り、引き抜きやすくなります。

対策:①複数の土壌消毒剤が本病に対して登録があるため、発生圃場では土壌消毒を行きましょう。

②育苗には無病土を用い、発病苗は速やかに除去して圃場に持ち込まないようにします。

③石灰などで土壌のpHを6.5以上に矯正すると発生が少なくなります。

キャベツ菌核病

病原: *Sclerotinia sclerotiorum* (スクレロティニア スクレロティオラム)

糸状菌(カビ)の一種です。菌核が土中で越冬し、そこからキノコ(子のう盤)を形成します。キノコから放出された胞子が伝染源となります。菌核の土中の寿命は2~3年です。胞子は茎葉の付傷部や活力の衰えた下葉などから侵入します。本菌は気温20度前後で多湿条件が続くと活発に活動します。非常に多犯性で発病しない野菜はほとんどありません。

症状:結球期から発生し始めます。初めは下葉の葉柄基部近くに病斑が出来、これが茎をつたって結球部に進行し腐敗させます。軟腐病のような悪臭はありません。

対策:①キノコから胞子が飛ばされる時期に薬剤を散布します。

②被害株を早期に除去し、畑に菌核を残さないことが重要です。



レタスピッグベイン病



病原: *Mirafiori lettuce virus* (MiLV) (ミラフィオリ レタス ウイルス)

ウイルスの一種でひも状に観察されます。*Olpidium virulentus* (オルピディウム菌)という糸状菌によって媒介されます。本病の発生適温は15~20℃で、病徴は気温20℃以下で明瞭となります。また、pH5.0以上の中性~アルカリ性の土壌では激発する傾向があります。

症状:冬春レタスで発生します。葉の縁から葉脈が透過し、網目状に目立つようになります。同時に葉の縁の縮れも激しくなります。

対策:①育苗は無病土で行います。

②圃場は石灰などのアルカリ資材を使用せず、出来るだけ酸性にします。

③発生圃場はレタスの作付を数年避ける、または定植時期を早めて少しでも高温な時にするか、春どり作型を選びましょう。